

悠久山公園

悠久山公園は春になると多くの人が訪れ、特に桜が満開の4月上旬から中旬にかけては多くの人で賑わいます。秋もまた人気の季節で、紅葉が散歩道に茶色、赤、黄色等さまざまな色を加えます。この公園は、すぐ東側の悠久山にちなんで名づけられました。公園のルーツは江戸時代(1603-1867)にまで遡ります。村の中心人物であった長岡藩主牧野忠辰(1665~1722)は、数本の桜の植樹を監督し、この地の魅力を大きく高め、人々の集いの場となりました。現在の公園は、長岡の300周年を記念して1918年に開園しました。エネオス石油の創業者で長岡出身の山田又七(1855~1917)の発案によるものです。

公園の入り口近くにある蒼柴神社は、250年近くの歴史があります。また、11月に行なわれる「七五三」で、子供の健やかな成長を祈願するために親が子供を連れて神社に参拝するなど、庶民的な風習と密接に結びついている。

もう一つの神社は、犬のシロを捧げています。地元の言い伝えによると、シロの主達は江戸から長岡に移り住み、シロを残して蒼柴神社の近くに住んでいたと言われています。シロは家族が恋しくて、家族と再会するために元の家から250キロ以上も歩いてきました。

2018年に長岡の400周年を記念してシロ神社は建てられました。

神社の近くには、市内の高齢者によって建設された「蛇橋 *snake bridge*」があります。橋の横には、作家であり教育の先駆者でもある小林虎三郎(1828~1877)の記念碑もあります。小林氏は、より良い未来のために自分の資源を再投資することを提唱した「米百俵」の思想を展開したことで知られています。名前の由来は、食糧不足にもかかわらず、隣の藩から寄付された米を食べずに売って、代わりに子供たちのための学校を建てようと提案したことに由来します。

動物好きの方や小さなお子様連れの方には、猿の囲いがある悠久山動物園がおすすめです。長岡市歴史資料館は、この公園の大きな魅力です。白を基調とした立体的な建物は、1868年の戊辰戦争で焼失した長岡城をはじめとする日本の封建時代の城郭をイメージしています。館内には、13代にわたって長岡市を牽引してきた牧野家や、第二次世界大戦中の海軍大将・山本五十六(1884~1943)など、現在の長岡市を築いてきた人々の生活を通して、長岡市の歴史を詳しく展示しています。